

津波の恐怖改めて痛感

石巻地区や女川原発、会派で調査

会派「かけはし」は8月29日から東日本大震災に襲われた石巻市や女川原発、仙台市などを訪れ、防止対策と復興状況を調査してきました。3・11以降、防災対策は県政の最大の課題となりました。震災から1年半が経過し、検証作業も進んでいますので新たな知見を得ることができると企画しました。

防災は訓練と連携

1日目は石巻市を中心に調査しました。機能停止した市役所の役割も担い、被災者救済の中心になった石巻赤十字病院は、新築で救護体制を一新したことが幸いしたそうですが、訓練や機関連携の重要性を改めて痛感しました。



石巻市の河岸には瓦礫が高く積まれていました。

石巻地区消防本部で聞いた話は壮絶でした。女川消防署は警報で消防車を高台に避難させたのですが、津波防災ビルに指定されていたので所長ら5人が住民対応で戻ります。津波に襲われて屋上から通信塔へとよじ登ったところに、津波に



消失した門脇小学校。児童は校舎脇の階段から高台に逃げたそうです。

流された漁船が衝突。5人は投げ出され、2人は大けがをしながらも救助されましたが、署長ら3人は行方不明のままです。

「まちなか復興マルシェ」も訪れました。民間主体で店舗を再開しようと立ち上げた商店街で、復興への息吹を感じました。

女川原発を見学する日の未明、震度5弱の揺れが東北を襲いました。対策に追われて見学は中止かと思いきや、「この程度では通常業務を継続しています」とのこと。そのまま原発に向



広谷県議と共に津幡所長らから女川原発の説明を聞きました。

かい、津幡所長らから説明を受けました。

女川原発は震源から130キロ。福島第一原発よりも震源に近く、13階の津波に襲われ、男鹿半島も1階沈下しました。しかし、海抜15階の高台に立地しているため、冷温停止でき、大事に至らなかったそうです。「人間の知見には限界があると、当時の津波高推定の5倍の海抜で設計した先輩

編集後記

8月中は関西広域連合議会や高校生議会議場が本会議場で開催され、いい雰囲気です。9月定例会の開会を向かえたのですが、谷村県議の手紙騒動で波乱の議会となりました。▽知事だろうと、ベテラン議員だろうと構うことなく私は論戦を挑んで

いますが、おのずとルールと相手への畏敬の念が必要です。議論は勝ち負けではなく、より良い選択をするための手段だからです。▽「秋きぬと目にはさやかに

たちの慧眼に敬服しています」と津幡所長。この設計裕度こそが、想定外の被災を避けるのに何より重要なのだと感じました。

宮城県漁協女川支部や復興に取り組む中小企業経営者でつくるNPOも訪問。意見交換しました。東京では中央官庁で聞き取り調査を重ねて鳥取に戻りました。今回も有用な調査ができたと思っています。

見えねども風の音にぞ驚かれぬる」と歌ったのは藤原敏行ですが、お手元にこのりれーしょんが届く頃には朝晩は寒くなっているでしょう。風邪など召さぬよう「ご自愛専一に願います。」

砂場隆浩県政ひろば

〒680-0023 鳥取市片原1丁目107

TEL 0857-50-0130/FAX 50-0641

tottori-kodomo@olive.plala.or.jp

県政へのご意見ご不満をお寄せ下さい

この紙面記載の記事は、下記のHPで詳しくご覧いただけます

<http://www.tottori-kodomo.jp>